

職業選擇の態度に関する研究

——特に農山村における実態分析——

熊 倉 弘

A Study on the Attitude for the Selection of Vocation

—— Especially on the Analysis of the Actual

Condition in the Rural Districts ——

Hiroshi KUMAKURA

1

近代社会においては、人間の経済活動はいちじるしく複雑となり、職業は高度に分化されてきた。アメリカ労働省編の職業辞典によれば、現在2万9千というおびただしい職種がある。社会的文化的環境はちがうとはいえ、わが国においても、職種の数はひじょうに多いと思う。このように多数の職種の中から、その個人にもつとも適した職業を選ぶことは、まことに至難なことである。

しかし、職業選択はその個人の職業生活を決定するものであり、この職業生活にうまく適応するか否かは、その個人の全生活を根柢から大きく左右するものである。ことを思うとわれわれは青少年の職業選択に大きな関心を払わずにはいられない。ここに職業選択の態度に関する研究の第一の理由を見出すわけである。

第二の理由として考えられるものは、勤労青少年の問題である。戦後の新しい教育制度の下に生まれた勤労青少年のためのただ1つの教育施設は、夜間の定時制高等学校である。今日定

時制高等学校は、独立併設あわせて1500余分校が1200余、生徒数は男女あわせて34万にすぎない。これを戦時中の公私立青年学校数約1万6千、生徒数250万に比べると、勤労青少年に関する限り、新教育は著しい後退であるといえよう。

勤労青年には、青年期がないといわれているが、学ぶことなくして人生には進歩はなく希望はない。学校教育においては、ガイダンスがその中心課題となつていいるが、働く青年、学ばんとする青年の教育にはガイダンスもカリキュラムも考えられていないのが、その実情である。

勤労青年の教育は、施設の拡充でもなく、往時の青年学校への復帰でもない。地域社会の特殊事情と、青年の生活の実態と心理の本質にふれたガイダンスの問題として取上げられなければならない。

勤労青少年の実態を数的にみると、文部省の統計によれば、6・3の義務教育を終つて上級学校に進学した者とししない者の数は、次表の如くである。

進路別 年次	卒業生総数	高校入学者数	就職者数	無職者数	死亡不詳
昭和23年	1,283,826 ^人 (100%)	633,905 ^人 (49.34%)	501,725 ^人 (39.73%)	124,392 ^人 (9.68%)	23,804 ^人 (1.25%)
昭和24年	1,588,227 ^人 (100%)	652,259 ^人 (41.06%)	717,777 ^人 (45.15%)	191,047 ^人 (12.02%)	24,744 ^人 (1.74%)

そのうち、就職者は大体次の通りである。

	昭和23年度	昭和24年度
農 林 水 産 業	299,035人 (59.68%)	437,932人 (61.07%)

製 造 工 業	113,995人 (22.72%)	154,832人 (21.57%)
商 業	38,060人 (7.57%)	46,325人 (6.45%)
運 輸 通 信 業	12,228人 (2.43%)	11,275人 (1.64%)
公 務 自 由 業	30,021人 (5.93%)	33,738人 (4.7%)
そ の 他	14,441人 (2.86%)	33,015人 (4.6%)

又、岩手県だけについて之を見ると、昭和24年度の中学校卒業者の卒業後の状況は、次表の通りである。

年 度	卒 業 生 總 数 (%)	進 學 者 数 (%)	進學しなかつた者 (%)	不 明 (%)
昭 和 24 年 度	20,207人 (100%)	8,418人 (41.6%)	11,690人 (7.8%)	99人 (0.6%)

そして進学しなかつた者のうち、農林水産業に就職した者は、7,425人 (63.5%) で、卒業者総数の約 36.7% を占めていることが報告されている。(岩手県労働部職業安定課編労働市場状況報告・昭和25年8月)

これらの不進学者(就職者数と無職者数)は前述の如く、青年中期という最も重要な時期に全く放置され、これに対する組織的教育の問題はほとんど顧られていない。このことは教育の機会均等の意味からも、わが国青少年教育体制の著しい盲点と考えられる。これらの勤労青少年あるいは学校外青少年 (Out - of - school youth) のために現在行われている教育は、高等学校定時制課程又は別科(短期教育課程)と、社会教育としての青年学級や青年クラブの程度にすぎない現状である。

ひるがえつて考えてみると、これらの不進学者は農山漁村においてひじょうに高い比率を占めていることで、問題は都市よりも農山漁村の問題になるわけである。特に終戦後全国的にやかましく問題になつている農村の2・3男対策の如きも、これに連なつた問題にすぎないのである。

これを職業指導という見地から考えてみると、農山村における不進学者はいわゆる自家就職として家事従事、もしくは家事の手伝いとして勉学の機会から閉め出されてしまわなければならない必然性があるかどうかは、一応検討されなければならないと思う。学校がおこなうガイダンスにより、あるいは父兄を啓蒙すること

によつてこれを打開することの可能か否かについて吟味することが、この問題の解決の1つの対策と考えられる。

この観点から、職業選択の態度について、父兄、生徒の二方面から分析を試みたものである。職業選択の態度は、これを心理学的にみれば職業意識というものが、その根柢をなしていると考えられる。尾高邦雄氏によれば、職業人の気質や意識は環境の心理として考えることができるという論点から、職業意識とは、職業に対する自意識つまり一定の職業人としての自覚である。そして凡そ自覚は反省の念に生ずるものであるから、常に何らかの自己評価を伴うものである。職業的自覚の場合に、その評価の尺度は、職業に附着している社会的地位の上下に求めたり、又その職業のもたらす物的報酬の大小に求めたり、あるいはその職業を通じての貢献の輕重に求めたりするものである。(尾高邦雄著職業社会学) その尺度の置き場所によつて、その人の職業意識の程度が推量されるわけである。要するに職業意識はイデオロギー化以前の現象であり、非合理的なる感情の域を脱しないものであるが、農村においては、この非合理的なる感情が大きく、わが子の職業選択の態度に影響を及ぼしているものと考えられることから、職業選択の態度の分析も農民の職業意識をその根柢として行つたのである。

1. 九戸地区、九戸郡3町5村10中学校
(笹渡中、宿戸中、長内中、小軽米中、小国中、
日野沢中、霞畑中、夏井中、野田中、大川目
中)下閉伊郡1村1中学校(菅代中)

2. 二戸地区、二戸郡1町5村6中学校
(上斗米中、館市中、田部中、鳥海中、浄法寺
中、姉帯中)

3. 一の関地区 東磐井郡4村4中学校
(曾慶中、長島中、奥玉中、舞川中)西磐井郡
9村9中学校(永井中、日形中、達古袋中、彌
栄中、涌津中、油島中、花泉中、厳美中、金沢
中)、江刺郡5村5中学校(玉里中、藤里中、梁
川中、広瀬中、黒石中)、胆沢郡6村6中学校
(衣川中、相去中、白山中、南股中、南都田
中、佐倉河中)。

調査項目

1. 中学校における進路別卒業生数

A. 中学校卒業生の卒業後の状況(昭和24
年度卒、昭和25年度卒、昭和26年度卒)

B. 前項Aのうち、進学しない者の内訳

2. 職業選択の態度とそれについての所見

C. 親(保護者)はわが子の将来の職業の
選択にどのような態度をとっているか、

D. 生徒は、自分の将来の職業の選択に対
してどのような態度でいるか、

E. 前項CおよびDの事項に対する教師の
所見。

調査時期 昭和27年7月～8月

調査方法 前述の調査項目による質問紙法

(註₁) 調査は原則として農山村の中学校を対
象としたのであるが、九戸地区および二戸地区
では町の中学校も調査の対象としたのは、進学
者よりも進学しない者の方がひじょうに多かつ
たので、調査の対象としたものである。(調査
から除外したのは、福岡町の中学校だけであ
る。)

(註₂) 地域性を考慮したこと。県南(一の関
地区)と県北(九戸地区と二戸地区)とによつ
て、量的にも質的にもかなりの差異のあること
を予想して、集計はすべて県南県北に大きくわ

けて比較対称する方法をとつたのは地域性を見
んとするためである。特に県北はいわゆる避地
としての性格を擲もうと試みたものである。

3

中学校卒業生の卒業後の状況について、昭
和24年度から昭和26年度の3ケ年の結果は第1
表の如くである。

まず始めに、第1表(A. B. C)の二戸地
区についてみると、進学者が卒業生数の約19～
20%で、残りの約81～80%が進学しないで他へ
就職したり、自家就職として家事従事となつて
いることがわかる。しかも3ケ年間における年
次の消長はほとんど見られない状態である。そ
して進学しない者の内訳を第1表(A'. B'. C')
についてみると、農林水産作業者が不進学者総
数の51～68%を占めているが、これはあきらか
にほとんど自家就職とみなして差支へないと思
う。更に年次の消長は年々増加の傾向を示して
いるが、これには何か理由があることであら
う。なお未定とか不明の者の比率も比較的高い
ことも注目すべきである。

つぎに九戸地区の表についてみると、約20%
前後の者が進学する以外は、80%の不進学者は
労働にその青春を消磨していることになる。こ
の地区は二戸地区に比べると、年次的には漸次
進学者が増加の傾向を示している点は、明るい
希望が持てるようである。不進学者の内訳をみ
ると、農林水産方面の従事者が60～70%を占
め、漸次増加の傾向を示している点は注目すべ
きであろう。

第3に一の関地区(東磐井・西磐井・胆沢・
江刺の4郡)の第2表(A. B. C)について
みると、進学者数が総数の40～55%となり、不
進学者数は60～45%となり、進学者数は逐年増
加の傾向を示し、不進学者数は漸減の傾向を示
している点は、県北の二戸地区、九戸地区に比
べて著しい特徴で、ここにはつきりと1つの地
域性を現わしていることが例示されている。更
に不進学者の内訳を第2表(A'. B'. C')につい
てみると、ここでも農林、水産従事者数が圧倒

第 1 表 (1)

A (昭和24年度卒)

進路別	地 区 別	二戸地区 (二戸郡6中學校)	九戸地区 (九戸郡10中學校)
高等 學 校	通常課程	43 (14.73)	89 (13.13)
	定時制課程	4 (1.36)	9 (1.33)
	別 課	2 (0.69)	3 (0.43)
その他の教育施設		6 (2.05)	10 (1.48)
進學しなかつた者		237 (81.16)	561 (82.74)
不 明		— —	6 (0.89)
計		292 (100.0)	687 (100.0)

B (昭和25年度卒)

進路別	地 区 別	二戸地区 (二戸郡6中學校)	九戸地区 (九戸郡10中學校)
高等 學 校	通常課程	28 (7.67)	97 (15.25)
	定時制課程	19 (5.21)	9 (1.42)
	別 科	— —	6 (0.94)
その他の教育施設		3 (0.82)	6 (0.94)
進學しなかつた者		315 (86.30)	516 (81.13)
不 明		— —	2 (0.32)
計		365 (100.0)	636 (100.0)

C (昭和26年度卒)

進路別	地 区 別	二戸地区 (二戸郡6中學校)	九戸地区 (九戸郡10中學校)
高等 學 校	通常課程	41 (10.73)	109 (16.52)
	定時制課程	19 (4.97)	14 (2.09)
	別 科	1 (0.26)	14 (2.09)
その他の教育施設		6 (1.57)	18 (2.69)
進學しなかつた者		304 (79.55)	511 (76.38)
不 明		11 (2.87)	3 (0.23)
計		382 (100.0)	669 (100.0)

第 1 表 (2)

A' 「A」表の中進學しなかつた者の内譯

進路別	地 区 別	二 戸 地 区	九 戸 地 区
1.事務的職業		11 (4.64)	26 (4.63)
2.又は自由職業			
3.農林・水産技術者・作業者		121 (51.05)	338 (60.25)
4.鑛山又は工的技术者・作業者		14 (5.91)	58 (10.34)
5.交通的職業		— —	19 (3.39)
6.商 的 職 業		16 (6.75)	35 (6.24)
7.8.9.10.その他の職業		13 (5.50)	67 (11.94)
未 定		1 (0.42)	6 (1.07)
不 明		61 (25.82)	12 (2.14)
計		237 (100.0)	561 (100.0)

B' 「B」表の中進學しなかつた者の内譯

進路別	地 区 別	二 戸 地 区	九 戸 地 区
1.事務的職業		11 (3.49)	18 (3.49)
2.又は自由職業			
3.農林・水産技術者・作業者		169 (53.65)	343 (66.47)
4.鑛山又は工的技术者・作業者		11 (3.49)	45 (8.72)
5.交通的職業		1 (0.32)	14 (2.71)
6.商 的 職 業		27 (8.57)	21 (4.07)
7.8.9.10.その他の職業		17 (5.40)	61 (11.82)
未 定		21 (6.67)	10 (1.94)
不 明		58 (18.41)	4 (0.77)
計		315 (100.0)	516 (100.0)

C' 「C」表の中進學しなかつた者の内譯

進路別	地 区 別	二 戸 地 区	九 戸 地 区
1.事務的職業		8 (2.63)	11 (2.51)
2.又は自由職業			
3.農林・水産技術者・作業者		207 (68.09)	354 (69.28)
4.鑛山又は工的技术者・作業者		21 (6.91)	39 (7.63)
5.交通的職業		3 (0.99)	7 (1.37)
6.商 的 職 業		18 (5.92)	22 (4.31)
7.8.9.10.その他の職業		21 (6.91)	59 (11.55)
未 定		20 (6.58)	18 (3.52)
不 明		6 (1.97)	1 (0.19)
計		304 (100.0)	511 (100.0)

第 2 表 (1)

A (昭和24年卒)

進路別	地区別	一ノ関地区 (1郡 24中学校)	内				譚	
			東磐井郡 (4校)	西磐井郡 (9校)	膽澤郡 (6校)	江刺郡 (5校)		
高等 學校	通常課程	477 (23.29)	46 (11.30)	174 (28.76)	161 (27.86)	96 (23.11)		
	定時制課程	201 (10.02)	31 (7.61)	30 (4.96)	52 (8.98)	88 (21.20)		
	別科	31 (1.55)	—	8 (1.32)	20 (3.46)	3 (0.73)		
その他の教育施設		100 (4.99)	5 (1.23)	18 (2.98)	58 (10.40)	19 (4.58)		
進學しなかつた者		1,196 (59.65)	325 (79.85)	375 (61.98)	287 (49.65)	209 (50.37)		
不明		—	—	—	—	—		
計		2,005 (100.00)	407 (100.00)	605 (100.00)	578 (100.00)	415 (100.00)		

B (昭和25年卒)

進路別	地区別	一ノ関地区 (4校 24中学校)	内				譚	
			東磐井郡 (4校)	西磐井郡 (9校)	膽澤郡 (6校)	江刺郡 (5校)		
高等 學校	通常課程	586 (29.65)	75 (20.44)	211 (35.82)	172 (29.51)	128 (29.29)		
	定時制課程	228 (11.53)	29 (7.92)	19 (3.23)	78 (13.37)	102 (23.34)		
	別科	38 (1.94)	5 (1.36)	4 (0.68)	20 (3.43)	9 (2.06)		
その他の教育施設		99 (5.01)	6 (1.63)	14 (2.38)	64 (10.97)	15 (3.43)		
進學しなかつた者		1,024 (51.82)	252 (68.65)	340 (57.72)	249 (42.71)	183 (41.87)		
不明		1 (0.05)	—	1 (0.17)	—	—		
計		1,976 (100.00)	367 (100.00)	589 (100.00)	583 (100.00)	473 (100.00)		

C (昭和26年卒)

進路別	地区別	一ノ関地区 (1郡 24中学校)	内				譚	
			東磐井郡 (4校)	西磐井郡 (9校)	膽澤郡 (6校)	江刺郡 (5校)		
高等 學校	通常課程	617 (31.19)	85 (20.29)	240 (40.81)	191 (34.11)	101 (24.57)		
	定時制課程	266 (13.45)	46 (10.97)	24 (4.08)	89 (15.89)	107 (26.03)		
	別科	36 (1.82)	—	12 (2.04)	21 (3.75)	3 (0.73)		
その他の教育施設		163 (8.24)	20 (4.77)	26 (4.42)	89 (15.89)	28 (6.81)		
進學しなかつた者		894 (45.19)	268 (63.96)	284 (48.29)	170 (30.35)	172 (41.85)		
不明		2 (0.10)	—	2 (0.35)	—	—		
計		1,978 (100.00)	419 (100.00)	588 (100.00)	560 (100.00)	411 (100.00)		

的に多く、85~79%を示しているが逐年減少の傾向を示していることは注目されてよいであろう。

高校進学者数の増加ということは、それ自身幾多の問題を持つにしても、教育に対する関心

とか、その重要性が漸次父兄に理解されてきたことと、生徒各自の自覚の結果のあらわれとして喜ばしい傾向である。

第1表の(1)、(2)、と、第2表の(1)、(2)によって同一年度毎の地区(二戸地区、九戸地区、一

第 2 表 (2)
A' 「A」 表の中、進學しなかつた者の内訳

進路別 地 区 別	一ノ関地区 (4郡 24中學校)	東磐井郡 (4 校)	西磐井郡 (9 校)	膽澤郡 (6 校)	江刺郡 (5 校)
1. 事務的職業					
2. 又は自由職業	30 (2.51)	5 (1.54)	7 (1.87)	15 (5.24)	3 (1.44)
3. 農林・水産技術者・作業者	1,022 (85.45)	273 (84.00)	317 (84.53)	245 (85.36)	187 (89.47)
4. 鑛山又は工的技術者・作業者	32 (2.68)	12 (3.69)	7 (1.87)	7 (2.44)	6 (2.87)
5. 交通的職業	6 (0.50)	—	1 (0.28)	4 (1.39)	1 (0.48)
6. 商的職業	31 (2.59)	4 (1.23)	15 (4.00)	7 (2.44)	5 (2.49)
8.9.10. その他の職業	32 (2.68)	3 (0.92)	14 (3.73)	8 (2.78)	7 (3.25)
未 定	35 (2.93)	28 (8.61)	7 (1.87)	—	—
不 明	8 (0.66)	—	7 (1.87)	1 (0.35)	—
計	1,196 (100.00)	325 (100.0)	375 (100.0)	287 (100.0)	209 (100.0)

B' 「B」 表の中、進學しなかつた者の内訳

進路別 地 区 別	一ノ関地区 (4郡 24中學校)	東磐井郡 (4 校)	西磐井郡 (9 校)	膽澤郡 (6 校)	江刺郡 (5 校)
1. 事務的職業					
2. 又は自由職業	16 (1.56)	4 (1.59)	3 (0.88)	8 (3.21)	1 (0.54)
3. 農林・水産技術者・作業者	868 (84.77)	213 (84.52)	281 (82.65)	214 (85.94)	160 (87.43)
4. 鑛山又は工的技術者・作業者	56 (5.47)	16 (6.35)	20 (5.88)	12 (4.82)	8 (4.37)
5. 交通的職業	5 (0.49)	—	1 (0.29)	4 (1.61)	—
6. 商的職業	21 (2.05)	—	10 (2.94)	3 (1.20)	8 (4.37)
8.9.10. その他職業	26 (2.54)	3 (1.19)	9 (2.65)	8 (3.21)	6 (3.28)
未 定	28 (2.73)	16 (6.35)	13 (3.53)	—	—
不 明	4 (0.39)	—	4 (1.18)	—	—
計	1,024 (100.00)	252 (100.0)	340 (100.0)	249 (100.0)	183 (100.0)

C' 「C」 表の中、進學しなかつた者の内訳

進路別 地 区 別	一ノ関地区 (4郡 24中學校)	東磐井郡 (4 校)	西磐井郡 (9 校)	膽澤郡 (6 校)	江刺郡 (5 校)
1. 事務的職業又は自由職業	12 (1.34)	2 (0.75)	5 (1.76)	5 (2.94)	—
2. 農林・水産技術者・作業者	709 (79.31)	208 (77.61)	217 (76.41)	146 (85.88)	138 (80.23)
3. 鑛山又は工的技術者・作業者	72 (8.05)	25 (9.33)	24 (8.45)	10 (5.89)	13 (7.56)
4. 交通的職業	4 (0.45)	—	3 (1.06)	—	1 (0.56)
5. 商的職業	26 (2.90)	—	11 (3.87)	5 (2.94)	10 (5.58)
6.9.10. その他の職業	30 (3.35)	7 (2.61)	13 (4.57)	1 (0.59)	9 (5.23)
未 定	36 (4.03)	26 (9.70)	6 (2.11)	3 (1.76)	1 (0.56)
不 明	5 (0.56)	—	5 (1.76)	—	—
計	894 (100.00)	268 (100.0)	284 (100.0)	170 (100.0)	172 (100.0)

ノ関地区)の比較ができよう。各表についての説明は省略するが、この表から岩手県の県南性と県北性という地域性を掴むことが可能であると思う。教育という広い分野の中の、中学校卒業生の卒業後の状況という、1つの問題だけに限定して考えても、その背後には農山村の経済的事情や、農村社会の伝統とか、農村人の人生観なり世界観、あるいは職業意識や職業観など、すべてのものが混然一体となつて大きく影響していると考えるべきであろう。

常識的に県南は文化の程度も県北よりは高く、すべて進歩的で積極性に富むといわれ、県北はいわゆる避地として、文化の浸透力も弱く、そこに住む人たちの活動も万事積極性を欠く傾向が強いといわれていることが、職業の選択という、この1つの事例によつても証明することができる。

以上第1表と第2表から取上げようとする問題は、不進学者数が卒業生総数の50~80%を占めるという事実。しかもその不進学者数の60~95%がいわゆる自家就職として無目的・無計画的に家事労働に従事させられて、人生において最も大切な16才~20才の時代を無教育的な境遇に追いやられて、不本意な生活を余儀なくしなければならないという事実は、止むを得ないことであるといつて放任しておいたり、看過したりすることのできない問題である。これは勤労青少年とか学校外青少年とかいわれる者の教育の問題である。

このような問題は教育行政的に解決すべきであることは当然であるが、親のわが子の職業選択の態度を改めることによつて、ある程度までは解決される問題ではないであろうか。

つぎに本論にはいつて、職業選択の態度について、特に農山村の実態の分析を試みることにしたい。

4

親はわが子の将来の職業の選択にどのような態度をとっているか——

この態度を分析するには、態度を規定する主

観的条件としての農民の性格と、客観的条件と考えられる経済的事情や労働市場の状況などの二方面から行うことができる。

農民の性格についての従来の説をみると、ルーエー (L' Hout; Zur Psychologie des Bauertums 1905) は農村牧師としての体験から、その特徴を観察した結果、(1)健康性、(2)保守性、(3)伝統性、(4)非人格性(非個人的)、(5)堅実性、(6)素朴性、(7)超感覚性、(8)自由性、(9)歴史性、(10)信仰的、(11)独断的などを挙げている。

ジレット (J. M. Gillette; Rural Sociology 1933)は、(1)個人主義、(2)保守主義、(3)時にはげしい急進主義、(4)根深い先入主、(5)宿命的、諦観的傾向の性質を数えている。

ギャルピン (C. J. Galpin; Rural Life 1918) は厩を用うる原始農業と機械を使用する農業に分け、前者の思想や感情の習性として、(1)アニミズム、(2)個人主義、(3)保守主義をあげて、これは農村の機械化によつて、その心理も変化してくると述べている。

トーマス (W. L. Thomas) とズナニーキ (F. Znaniecki) はポーランド農民の生活分析から、家族生活からは強い連帯性、社会組織から伝統と保守主義、近隣関係からは部落根性が生ずると説いている。

サイムス (N. L. Sims) は農民の精神態度の特徴として、(1)極端な個人主義、(2)保守主義、(3)呪術的、(4)感動性と被暗示性、(5)儉約と質素、(6)猜疑心、(7)卒直を挙げている。

以上の諸説は農民の性格一般で、特に職業選択の場合、そのいずれが強力に作用するか断言できない。私は主観的条件として、(1)無関心、(2)因習的、(3)日和見的をあげ、客観的条件として、(4)経済的事情、(5)労働力不足を挙げることにした。

(1) 無関心という部類に属するもの。

事例一全く無関心。過半数は職業選択に無関心で、どうにかなるだろうという考え方が大きく支配している。(以上二戸地区)放任的態度で、子供の自由に任かせる。(一ノ関地区)

(2) 因習的という部類に属するもの。

事例一子供を絶対に他に出したがないという傾向が強い。学校を終えるとすぐ、男は林業、女は農業というように自家手伝をさせて、一定の年齢に達すると山野を開こんで農業をするという考え方。農業をやつて居れば食うに困ることがない。長男は世襲的に親の職業をつぐ。(以上二戸地区) 昔からのしきたりの職業(農、炭焼)に閉じこもっている。長男には家業をつがせる。2・3男に対しては比較的職業選択の自由を与えている。子供を手許において可愛いがる。(以上九戸地区) 長男だから家業をつがせ、長男でない者はどこかへ出したい。2・3男と女子は一応家業に従事させて、男は婚に、女は農家の嫁にする。食糧に困らぬから、子供を他に出したがない。子供が進んで進学就職しようとする場合でも、過去の実例や因習にとらわれて、許可しない。百姓の子は百姓になればよい。(一ノ関地区)

(3) 日和見的という部類に属するもの。

事例一卒業したら当分の間家で働かせる。一先ず家の手伝をさせて、そのうちに良い就職口を探そう。(二戸地区) 高校に入れておけば何とかなるだろう。卒業後1~2年は親の手元において、様子を見てから大工とか左官のところへ弟子入りさせる。卒業後20才位まで家業を手伝わせて、それから何とかしよう。(一ノ関地区) 無関心ということは、親の無知の結果と考えてよいであろうから、教育のない、無学の親の中にはこのような態度の者が若干居ることは事実である。因習的ということは、農民の性格の諦観的であること。伝統性の強いこと。永続性を持つていることなどに由るものといえよう。農民は自然の前ではただ平伏し、服従するより他はない。しかし農民たちは自然の災害から受ける運命に打かつて生活を持続するという永続性がある。たとへ自分が敗れても、子供たちがこの家を継承してくれるという確信に生きてい

るのである。

日和見的態度は農民生活の悠久性の所産であると考えられる。悠久なる天地の運行の下に生活する農民には、こせこせしたところがない。又農民たちの生活設計は悠久の姿を持つことなどから養われた農民性格の一端であろう。

(4) 経済的事情という部類に属するもの。

事例一大部分は農を営み、傍ら出稼によつて現金収入を得て生活している関係上、子供の将来を案じながらも、子供が働ける年頃になると、労働することを要求する。眼前の小利に心をうばわれて、将来のことに盲になつて、卒業後1~2年してから賃金の高い土工、材木運搬の仕事に従事する。(二戸地区) 子供の将来のことは考えているが、現在の生活を立てるといふ焦眉の急に追われている。家計の点から考えて、大工・左官・土工・屋根屋などの有利な職業につけようとしている。(九戸地区) 漫然と暮してもどうやら生計が保てるので就職の必要を感じない。家業に従事させないと生活上困る。とにかく何でもよいから現金収入をはかる。男は独立するまで女は嫁ぐまで、就職して独立資金なり結婚資金をつくる。(一ノ関地区)

(5) 労働力不足という部類に属するもの。

事例一子供に対する父兄の希望(1例) 進学5%, 進学を望むが経済的に不可能15%, 卒業後1ヶ年家事手伝をしてから就職5%, 女子は裁縫と農事の手伝20%, 農業従事55%。田畑へ遠いこと、家畜の飼育管理、開墾作業、各季の製炭作業などのため人手不足を補う。(九戸地区)

手不足だから自家労働力として家業の手伝をさせる。(一ノ関地区)

経済事情については、大内力氏の研究(岩波全書「農業問題」)によれば、日本の農村は農業をもつて自家の生計をささえていくことができない貧農層でおおわれているということができると報告されている。貧農層は農業所得で家計費を賄えないのであるが、それは1つには自家

労働力に対して経済規模が零細であることである。そこで農業外収入をあげるために、自家労働力を他に売ることによつて、賃銀収入を得るか、または小営業を自営するかしている。後者の場合でも、たいがい炭焼きをすとか、薪材の切出しをすとか、薬工品をつくるといった仕事で加工賃をもうけるための仕事である。このあたりに、わが子を早く家業に従事させる理由があるようである。

労働力不足については、過剰人口に悩む農村に労働力不足ということは矛盾も甚だしいようであるが、必ずしもそう断定はできないようである。過剰な人口を有している農家経済では、過剰になればなるほど、低下する生産水準を高めるために、より大なる労働力を投下して、これをカバーしなければならなくなる運命の下に農家経済がおかれている。ここに過剰にして過労ならざるを得ない農家経済のジレンマが発生するわけである。すなわち、零細農なるが故に家族構成員の過剰に悩みながら労働力不足に苦しんでいる農家も少くないのである。

高等学校進学に関して、父兄の考え方をみると、(1) 「ただ世間えの体面」とか「虚栄」で進学させる父兄が意外に多いことと、財産のある者は将来の見とおしもなく、ただ漫然と高校に入学させていること。(2) 子供の能力が中学だけでは不十分であるから、高校に入れようとする者、(3) 他家の子供が行くから、うちの子供も進学させよう。そして高校さえ出て居れば後は何とかなるであろう。という者など、農民の性格の一面としての体面性ということが如実に反映していることがわかる。

2・3男女子に対しては、(1) 2・3男だけは高校卒業の能力があれば、農業以外の職につけよう。(2) 女子は高校卒業の資格を持てば、嫁ぐ時に有利であるから高校に入れよう。(3) 男は婚にやり、女は農家の嫁にしよう。(4) どんな仕事でもよいから農業以外の職につかせよう。というような考え方をしている。ここでも安定性という農民の特性が強く底流として作用していることが看取できよう。

しかし、自覚した農民たちは、わが子の将来について非常に真剣であつて、(1) 子供の個性を知ることに努めたり、(2) 子供の要求をみたしてやろうとする努力をし、(3) 2・3男については、学校との相談や職場の開拓を自発的におこなっている事実は高く評価しなければならない。

親の権利で子供を自分の思うとおりにできるという観念から、個人として人間として尊重しようという方に認識を深めてきたことは喜ばしい傾向である。

この傾向は地域的差があつて、県南は県北よりも、新時代に自覚した農民がはるかに多いようであり、県南でも都市に近い交通の発達した農村は辺鄙を農村よりも、更に進歩していることは勿論である。

5

生徒は、自己の将来の職業の選択に対してどのような態度をとっているか。――

発達心理学的にみれば、青年の将来の職業に対する関心度は青年期中期(15・6才～17・8才)の中頃から急に高まつてくるようである。これは精神発達の必然的な過程であつて、使命観が強く現われ、独立生活への欲求が強くなり、自己の将来についての具体的方向がでてくるからである。希望職業調査の結果を見ても、非現実的な希望から現実的な希望にかわり未分化なものから分化した職業へと発達してることがわかる。

しかし、中学校を卒業する年齢は、15～16才で、一般的には職業的関心度はそれほど高くはないといえようが、中学校在学中における教育、特に職業指導の結果、希望職業の選択に対する関心はかなり高められているべきであると考えられる。

さて、本調査の結果について述べると、何といても父兄の影響が顕著に表われていることである。そのために極めて消極的態度を見せたり、無関心の状態であつたり、依頼心が強すぎたりする生徒の比率が非常に高くなっている。

これは特に、農村における市民社会の未発達ということから来ることであろう。多くの未開社会の青年はその属する種族の生活の伝承者としての責任を負わされるところの「移行の儀礼」

(Rite of Passage) を持つているが、日本社会、特に農村社会は、要するに親一子の権力関係、上下の支配関係によつて維持されているといつてよい。そしてただ義理と人情の関係の中に閉じこもつた本質的に孤独な人となる傾向を帯びているわけであるから、子供は親のいうとおりになる傾向が強くなることは否定できない。(青年の発達課題と社会文化的要因：古旗安好，青年心理，第2巻，第4号)

以下事例をあげてみると。

(1) 父兄の影響—親の生活というものに強く曳かれる。親の職業を受けつぐ。希望職業としては炭焼，大工，農業，運転手。生徒は生徒としての抱負や希望を持つが，家庭の現実の姿の前には，それも不本意に消失してしまう。(九戸地区)。父兄の態度から，子供たちは自分の将来について真剣に考える機会を失っている。父兄の考のまま，卒業後2～3年してから就職しようとしている。少年らしい憧憬は持つているが，それには程遠い家庭の現実にしばられて，宿命的な気持を抱いている。(二戸地区)

(2) 依頼心(自主性の欠除)—依頼心が強い。自分の適する仕事というのは，自分の仲間の志望するものを，自分の志望とする傾向が強い。

(二戸地区)。自己の能力対す不安から依頼的になる。長男，長女だから親のいうままになつて，家の仕事をする。(一ノ関地区)。

これは，親の束縛のきびしさに対して，反抗という形式でなく，服従という型をとる青年がおちいるものである。何をいわれても，親のいうとおりになり，自主的な態度の片鱗は具体的には何1つ示さないで，過度に依頼心を助長してしまう結果である。

(3) 無関心—無関心である心理を分析すると，無知と希望のないことと逃避的の3が考えられる。無知の例としては，食うことだけはさしあつて困らないから，希望なしの例では，

家が貧しいからといつてあきらめている。逃避では，父兄たちの惨な生活を見るにつけ，これを改善して楽しい農家にしようという考はなく，逃避したい気持を抱いている。

依頼心とか無関心は消極的態度のあらわれであるが，その理由を挙げると，(1) 進路方向がきまらない。(2) 子供の意見が無視され，親の意見に従わさせられる。(3) 家中の者が自分の職業について考えてくれない。(4) 自信力の欠除などで，自卑心・劣等感がますます強くなつていく原因が，ここにも潜んでいるようである。

しかし，積極的に自分の将来の職業の選択に努めている生徒も，極く僅かながら居ることは見逃せないことである。すなわち，農業を嫌つて事務系統の職を望む傾向が強く，給仕をしながら勉学するとか，仕事をしながら学校へ通うとか，女子は紡績工場のようなところの工員を志望するという類である。これも本人の自覚の結果によるものと，父兄の勧奨などによるものがある。

2・3男は自分で就職口を探したり，職業指導所に入所する傾向が強くなりつつある。ようである。又，父母の丈夫なうちに勉強したい。大人になつてからではおそいから，今のうちに自分の職業をきめたい。父母が老齢であるから働らこう，という理由による者もある。

もちろん，これについても県南性と県北性のちがいがはつきりと現われているようである。県南では積極的動きが非常に強くなつてきているが，県北では季節の出稼ぎが多いし，学業成績のよい者が職業選択に比較的積極的であると報告されて，全般的にはその動きは極く僅かであるにすぎない。

一例にすぎないが，西磐井郡の永井中学校(同校千葉教諭調査)の場合では，職業選択に積極的であると思われる者は全体の2%，消極的と思われるもの78%，無関心と思われる者20%という数字を示している。

江刺郡玉里中学校の例(同校美濃川教諭調査)をとると，

事 項	男	女	計	
① 進學就職について父兄と相談しコースを決定しているもの	14	10	24 (23.08%)	48.08%
② 父兄と相談はしていらいが自分でコースを考えているもの	18	8	26 (25.00%)	
③ 漠然としてコース未定のもの	8	12	20 (19.23%)	51.92%
④ 何も考えていないもの無關心	16	18	34 (23.69%)	
計	56	48	104 (100.00%)	100.00%

玉里中学における23年以來の統計は次表で、

	22 年	23 年	24 年	25 年	26 年	27年(本年度)
① + ②	—	29.12%	35.63%	46.47%	45.16%	48.08%
③ + ④	—	70.8%	64.37%	53.53%	54.84%	51.92%
計	—	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%
調 査 人 員	—	63	81	103	95	104

逐年積極的態度の増加の傾向を示していることがわかる。全体的にみると、生徒の積極性は、1つには家庭の影響によることは否定できないが、他の1つの理由は、中学校における職業指導の如何にあるといえよう。

以上によつて、職業選択の態度についての分析的考察を終つたのであるが、父兄の態度、生徒自身の態度に対して、中学校におけるガイダンス特に職業指導の立場から、どう指導すべきであるかを具体的に、中学校の教師に意見を求めたのであるが、その結果について、つぎに述べよう。

6

親のわが子の職業選択に対する態度並びに生徒自身の職業選択に対する態度についての教師の意見——

(1) 親の態度に対する意見として、第1のものは封建思想の打破をあげている。これは、職業選択に対する親の蒙を啓くこと。親の立場でなくて、子供の立場を考えてやること。新時代の認識を持たせること。(九戸地区)父兄の啓蒙のため、家庭訪問、父兄懇談会を開くこと、2・3男の職業開拓について積極的になるように啓蒙する。(二戸地区)。

第2は、新学制に対する理解を持たせること

である。すなわち、農村には教育はいらぬという考え方を改めさせる。仕事第1、勉強第2という觀念を改めさせる。(九戸地区)

第3. 子供の将来ということに深い関心を持つように仕向けること。すなわち、親が早、楽をしようという自分本位の考え方を捨てて、子供の幸福を希うような気持ちを持つようにさせる

第4. 子供の能力に対する認識を持たせること。

第5. 農業経営の合理化。これは学校教育の直接の問題ではないが、多数の教師の意見として取上げられている。

第6. 労働市場とか労働事情に関する知識を附与すること。

第7. 職業相談の組織によつて父兄の相談に応じること。

(2) 生徒の態度に対する意見

第1. 職業情報を提供すること。すなわち、職業に関するいろいろの知識を与えること。職業には広い分野のあることを知らせること、職場の見学を行わせること。社会と職業との関連を具体的にわからせること。社会見学、職業情報の提供によつて社会的見聞を広め、将来に希望を持たせること。

第2. 自己の能力に対して自信を持たせるようにすること。すなわち、生徒に自分の能力を

自覺させること。

第3. 職業相談を受けさせること。相談の回数多くすること。希望傾向が雷同的に1方に偏しないようにすること。生徒とゆつくり話し合う機会を多くつくること。

第4. 職業・家庭科の教育内容を充実して生徒がよろこんで学習するように仕向けること。

第5. 職業実習を多く体験させること。すなわち、仕事の体験を通して、職業を理解させること。参観や実習によつて、職業に関する知識や経験をゆたかにさせること。

親の教育とか、啓蒙ということは、学校の教師は、生徒の指導のほかに、その地域社会の人たちの教育という非常に困難な仕事を背負いこんでいると考えてよい。したがつて村の人たちとの間にいろいろのトラブルも起きることであろうし、とかく無気力な教師になりやすい原因もここに含まれていると考えるべきであろう。

生徒に対して挙げられた意見は、すべてその学校の教育計画の問題に還元されてしまうもので、単に職業選択の指導だけに止まらず、学校職業指導の在り方についての意見とも考えられる。農村の学校では職業指導は不要であるとか、必要性は少いという声もないことはないが、声高くその必要性、不欠缺性を叫んでいる農村教師の多いことは、前途のあかるさを信じてよいであろう。

7

むすび——職業選択に対する態度の実態分析の結果の第1は、農山村においては職業選択の態度がひじょうに消極的であるということ。第2は、ひじょうに有情的(感情的)な農民心理が強くはたらいているということである。

第1. 農村社会は身分的制約と、地域的小社会の束縛から解放されていない、前近代的な社会の段階に止まつていると考えてよい。社会学的にみれば、未だ第1次集団(primary group)の段階にあつて、家族的身分と主従的身分の合体した二重の身分的結合の社会であつて、封建的家族主義のおこなわれている社会である。

(福武直; 岩波講座 教育 第2巻 戦後の日本民主化の過程と問題 3. 社会)

かくて個人は家族主義的結合に強く規制され、家族主義的に形式されていくのである。家族主義的に形式される人間にとつては、家族外の社会は、一般に荒波の立つ憂き世と考えられ、自由に独立しがたい人びとには、家族のみが彼等の生活を保証してくれ、安息を与えてくれる場所であると考えて、その小さな殻の中に閉じこもることになり、すべてが消極的になつていくのである。この消極的な態度が、職業選択の態度にも現われたものと考えてよいと思う。

第2. 農村社会は現代社会と孤立したのではなく、現代社会の中にあつて、その動きの波の中に存在する前近代的社会であるというところに、農村社会の複雑な性格が見出されるのである。マックス・ウェバー(Max Weber)は近代社会は合理性の原則によつて打ち立てられ、前近代社会は、有情的(感情的)、伝統的な支配のもとに導かれていると指摘しているが、農村の有情的な雰囲気は、その家族生活の中に見ることができる。いつしよに苦勞し、いつしよに暮しを楽しむ生活共同体としての家族は、すべて有情的生活の中にとけこんで、個人の利害に対する勘定などはすべて退けられ、家の権威の前に、個人生活をぎせいにし暮すことが仲よき家族生活の理想としてよこばれているのである。このような有情的、伝統的農民心理が、わが子の将来の職業の選択にも有力に作用しているものと解釈したいのである。

参 考 文 献

- 田 崎 仁 : 青年心理と青年運動. 青年心理, 第1巻 第2號.
- 小 澤 榮 一 : 進學指導. 青年心理, 第1巻 第4號.
- 藤 原 喜 悦 : 中學生の職業に對する品等, 青年心理 第1巻 第4號.
- 野 島 忠太郎 : 職業選擇に關する青年の悩み, 青年心理 第1巻 第4號.

佐 香 榮次野 : 農村青年の職業選擇, 青年心理,
第2卷 第2號.
山 田 清 人 : 農村青年の文化的意欲, 青年心
理, 第3卷 第1號.
野 尻 重 雄 : 農村社會の構造と農村青年の悩
み, 青年心理, 第3卷 第3號
古 旗 安 好 : 青年の發達課題と社會文化的要
因, 青年心理, 第2卷 第4號
岩手縣勞働部職業安定課: 岩手縣勞働市場狀況報告

昭和25年8月

第7回 I F E L 研究集録, 職業教育管理

大 内 力 : 農業問題, 岩波全書
福 武 直 : 戦後の日本民主化の課程と問題,
3. 社會, 岩波講座教育第2卷
有 澤 廣 己 : 同上, 2. 經濟, 同上.
青 山 秀 夫 : マックス・ウェーバー. 岩波新書
牛 島 義 友 : 農村兒童の心理.
〃 青年の心理.

ABSTRACT

This paper is a report on the study of the attitude of the people for the selection of vocation in the rural districts in Iwate prefecture.

The results of the analysis are as follows :

In the first place, the people are very negative and conventional and take a waiting attitude in the selection of their vocation. Some of them in the extreme cases, are taking a quite indifferent attitude for it.

Secondly, they seem to be strongly influenced by the psychology of the tillers of the soiles which is very much humane and conventional.

These two things lie on the facts that the social state of the rural districts in this prefecture is on the stage of pre-modern, feudalistic family system, and that in such a society one holds it dear to be ideal to sacrifice his own personal life for the authority of his family.